

「香油注ぎ」

2014年11月18日

マルコによる福音書 14 章 3 節～9 節。 イエスがベタニアで重い皮膚病の人シモンの家において、食事の席に着いておられたとき、一人の女が、純粋で非常に高価なナルドの香油の入った石膏の壺を持って来て、それを壊し、香油をイエスの頭に注ぎかけた。そこにいた人の何人かが、憤慨して互いに言った。「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに。」そして、彼女を厳しくとがめた。イエスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜ、この人を困らせるのか。わたしに良いことをしてくれたのだ。貧しい人々はいつもあなたがたと一緒にいるから、したいときに良いことをしてやれる。しかし、わたしはいつも一緒にいるわけではない。この人はできるかぎりのことをした。つまり、前もってわたしの体に香油を注ぎ、埋葬の準備をしてくれた。はっきり言うておく。世界中どこでも、福音が宣べ伝えられる所では、この人のしたことも記念として語り伝えられるだろう。」

上記の「香油注ぎ」の出来事は、受難週の緊迫した日々の中で、主イエスにとって本当に嬉しい、また、慰められることであった。受難週の間、主イエスの一行はベタニアを宿泊所にしていて、重い皮膚病に罹っているシモンの家で食卓に着いていた。そこへ、一人の女性が入って来て、高価なナルドの香油が入った石膏の壺を壊し、主イエスの頭に香油を注ぎかけた。ナルドの香油は、大事な来客が見えた時、頭に一、二滴注ぎ、歓迎の意を表す。また、死者が出た時、遺体に塗って弔意を表す。もちろん、死臭を消す目的でもあった。当時の女性たちは花嫁に行く時、ナルドの香油を持参品にした。結婚に備え、娘たちは爪に火をともしよう買い貯めていたのである。

彼女は惜しげもなく、主イエスに一気に注ぎかけた。室内はかぐわしい香りで満ちた。これを見た弟子たちの何人かが「なぜ、こんなに香油を無駄遣いしたのか。この香油は三百デナリオン以上に売って、貧しい人々に施すことができたのに」と厳しく咎めた。1 デナリオンは一日の生活費である。300 デナリオンは、約 1 年分の生活費に当たる大変な高額である。弟子たちは、日頃から、貧しい人々に愛を注がれた主イエスに倣うなら、効率のいい使い方があるではないかと言った。「もったいない」という利に合った発言である。

この弟子たちの咎めに対し、主イエスは 4 つのことを言っている。① 彼女のするままにさせておきなさい。彼女を困らせてはならない。私に良いことをしてくれた。② 貧しい人々はいつもいる。したい時はいつでも彼らを助けることができる。私はあなた方といつも一緒にいる訳ではない。③ 彼女はできる限りのことをした。つまり、私の体に香油を注ぎ、前もって埋葬の準備をしてくれた。④ はっきり言うておく。彼女の「香油注ぎ」は福音が宣べ伝えられる所では、世界中で記念として語り伝えられるだろう。

大切な言葉は ③ である。受難週の日々、主イエスの死を賭した心を理解した者は一人もいなかった。弟子たちは皆、イスラエルを解放する王になれるという期待に酔っていた。その中で、彼女は主イエスの言葉と振る舞いから、死に行かれると悟ったのである。その時、持てるナルドの香油を全て注ぎかけて、埋葬の準備、お別れをしたのである。誰も理解しない中、彼女だけが主イエスの心を見抜き、最大の愛を表した。主イエスは彼女の行為をどれほど嬉しく、受け止めたのだろうか。愛するとは相手を理解することである。そこでは、常識を超えた出来事が起こる。